

保育カンファレンスの検討（その1）

— 保育カンファレンスを現場から考える —

○田中 三保子 榎田 正子 吉岡 晶子 伊集院 理子 上坂元 絵里 高橋 陽子 尾形 節子

田中 都慈子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

田代 和美（お茶の水女子大学）

1. はじめに

保育者としてクラスを担任していると、子どもをどのように理解したらよいか、子どもにどう関わったらよいか、悩むことが多い。しかし、自分一人で悩んでいてもなかなか解決の糸口がみつからず苦勞する。保育者同士の話し合い、さらには、保育者のことをよく理解した上で広い視野から保育を客観的に考えることができる人と、対等の立場で話し合いができるとすれば、悩みに関してはより発展的な解決方法をみつけられるのではないだろうか。また、こうした話し合いを継続することができれば、保育者自身のの子どもへの理解のしかたや関わり方の特徴に、自分で気づくことができる機会が増えるのではないか。こうした考えのもとに、私たちは園内研修を行ってきた。今回の報告では、これまでのカンファレンスの経過を、園の研究主任（田中三）の立場から振り返り、問題点を探ってみよう。

2. 方法

1回ほど2時間のカンファレンスを月1～2回行った。期間は94年5月から96年1月までの約1年10か月間である。カンファレンスのメンバーは、学級担任6名、副園長、非常勤職員各1名、それに保育関係の大学教員1名を加え、計9名である。テーマはあらかじめ決めず、その時々で話したい人が話題提供する形で進めていった。（テーマを決めなかった理由は、それまでテーマによる話し合いは重ねてきていること、保育者によって関心を持ったり気になることが違っていること、その時々その保育者に寄り添う形で話し合うことが「気づき」につながると考えられること、私の考えによった）。

3. 経過

(1) 94年度 1回（5/30）～4回（7/11）

新入園児を迎えて、それぞれの保育者の悩みなどが話題として出されるが、深まっていかず話が流れていく。その理由としては、①今までテーマについての話し合いはしてきたもののお互いの保育内容までは語り合っていないので、発言しにくい雰囲気がある。②それぞれの保育者が自分の保育を語ることに慣れていないため寡黙になりやすい。③今年度から新しくメンバーに加わった大学教員とはまだそれほど親密でない。④研究主任として話を深めたい、保育者自身に気づいてほしいとの思いから私が自分の見方を述べるが多くなり、他のメンバーにとっては私の考えを押しつけられているような気になって余計しゃべりにくくなる。等があげられる。

(2) 5回（9/19）

担任にとって気になる存在としてY子が話題に出る。しかし、

話し合いは深まらず、研究主任のいうことは理論としてはその通りだけれど実践には結びつかないという思いを、それぞれの保育者が抱く結果となり、気まずさを残すことになる。（私自身は子どもの見方などについての他人の示唆から多くを学んできており、皆同じはずとの思いこみを他の保育者に押しつけていることに全く気づいていない。ただ気まずさの主要な原因は私の一方的な話にあったのでこれからは皆の話を聞くようにしようと反省している）。

(3) 6回（10/17）～8回（12/19）

遊戯室の遊具の検討など全員で共通理解しておくべき話に開始する。必要に迫られて出た話題であったが、保育者の内面に深く関わらなくてすむこと、それぞれが発言しやすい話題であったことなどから活発に意見が交わされ、さらにお互いの考えを知り合う良い機会になった。

(4) 9回（1/30）～10回（2/27）

研究のまとめをどうするかについて検討する。記録を出し合おうとの私の提案は、次回の研究会をそれに当てることで了承される。出された記録は視点も書き方もあまりにばらばらでまとめようがなく、研究のまとめとしては別の方向でいくことになる。

(5) 95年度 1回（4/19）～3回（6/8）

年度初めに当たって共通理解しておくべきことについての話し合いの後、今後の研究の方向を探ることから、それぞれが記録を書いて出し合おうということになる。内容形式とも書く人にまかされた。

(6) 4回（6/12）～8回（7/21）

テーマは異なるがその人らしさの表れた記録が5つ提出された。昨年度の最後に記録を書いたことが活かされたようである。個々の記録内容についてほぼ2時間ずつ全員で検討を行った。記録があるので提出者のテーマに添った話し合いが比較的活発に行われた。しかし、自分で問題をたて既に解決も見つけているもの、保育者の心の動きが読みとれないものなどは話としては深まりにくかった。夏休み中に各自のテープを開き直し、考えたことをまとめてくることを研究主任が要請し、了承された。（4回目の話題のとき、私は提案者にT夫への関わりが先走りすぎたのではないかと問いかけをし、それに対し確かにそうだったけれどもでも…との返答で話がかみ合わないことがあった）。

(7) 9回（9/25）

1学期のまとめについて話し合い、その結果から、記録を書

いたことも、それをもとに話し合いをしたことも、それぞれに意味があったことが確認された。実際にどういう意味があったのか検討をしてみたいという研究主任の提案について協議した結果、1学期に得たことをこれからの保育の中で確かめ、記したものをもとにさらに話し合っていこうということになった。

(8) 10回(10/11)～12回(11/28)

1学期の確認記録をもとに話し合う。前と同じテーマについてそれぞれの捉え方が深くなり、対応のしかたを全員で模索できるようになってきている。他の保育者が、提案者に添いながらも時には自分の保育を振り返ることができるようになった。

(11回目の時に、T夫についての話で、提案者が納得してないのではないかの疑問が大学教育から出された。それについてのやりとりの中で、私は、提案者の行為はT夫を確かめるために必要だったこと、今まで私の捉え方の枠を皆に押しつけていたことによく気づき、ここから形だけでなく本当の意味で相手の立場に立つ努力ができるようになった)。

(9) 13回(12/1)

今まで記録を出していなかった保育者から記録が提出され、それについて検討する。初めは提案者が何を表現しようとしているのかが読みとれなかった。話し合ううち、H夫に対しどうかかわったらよいかいつももやもやして、自分自身に不信感をもってしまっていることを話題にしたかったことに本人が気づく。さらに話し合ううち、保育とはこうあるべきという理論が自分の子どもへの関わり方を制約していることに自身で気づいていく。

(10) 14回(12/22)～16回(1/29) 今までのほぼ2年間にわたる話し合いを通じて、メンバーそれぞれが何を得てきたかについて、書いたものを持ち寄り話し合う。13回目の提案者からは、H夫どうまく関われないと自分が悪いような気がして自分を責めてしまいよけい関わりづらくなっていたが、自分の捉え方の特徴に気がつく動きやすくなり、頭でわかっているも動けなかったことが試してみられるようになったとの発言があった。他の保育者からは以下のようなことが出された。①初めは話せなかったが言いたいことが言いたいときに話せるようになった。②記録を書くことや話すことを通して自分の保育について深く考えるようになった。③話し合いの土台としての記録の書き方に工夫の余地がある。④保育の中で自分が何を感じ何を考えて行動しているのかを見つめ直す機会になった。⑤他の保育者も同じような悩みを抱えているとわかって勇気づけられた。⑥子どもの理解や対応の仕方へのヒントが得られ、新たな気持ちでこれからの保育に臨むことができるようになった。⑦お互いの保育に対する考え方がわかって不必要な構えがなくなり、また話題に出たことで視野が広がり他のクラスの子どもとも保育者として自然に関われるようになった。⑧自分に欠けていた保育の視点に気づかされた。⑨話し合いでお互いを出し合った結果、他の人の目を気にすることなく自分

の考えで保育を進められるようになった。⑩話し合いで考えたことについて気にしすぎると保育者の動きは却ってぎくしゃくしたものになって、子どもとの関係が不自然になる。⑪実践の場では、話し合いで考えたことは意識の下に沈ませて自分の感覚を大切に行動する方が、子どもと本当の意味で触れ合えるのではないかと、そういう感覚を磨いていきたい。⑫保育を通しての生の人間としての生の感覚を素直に話し合えるようになったことは、それぞれの保育者を通して保育に生きてくるのではないかと。

4. 考察

2年近くにわたる私たちの保育カンファレンスの経過は、みてきたように決して順調なものではなかった。初期には発言者は決まった人になりがちで、その迷いに対し、自分なりに気づいてもらうための一つの考え方のつもりで研究主任が考えを述べると、それがその場を支配してしまい他の人は何も言えなくなってしまう。話し合いを活性化させようとして私が話せば話すほど気まずさがふくれあがる。そのピークが94年度5回目のY子の話題の時であった。その後の環境設定など共通の話題についての話し合いは、必要性はあったものの、それぞれに深刻な状況を避けたい気持ちが働いていたことも大きく影響していたと思われる。しかしこの共通理解のための話し合いをしたことが、皆の発言を促し肩の力を抜いてお互いを理解し合うきっかけになり、話し合いに主体的に関わろうという気持ちを育てることにつながり、さらに忙しくとも記録を書いて忘れないうちに話し合おうとの機運を生んだ。記録をもとにした話し合いの繰り返しの中で、それぞれが少しずつ素直に自分を表現できるようになり、内容をさらに深めたいとの気持ちから、考察結果を実践に戻し再び考察することになった。その経過を通して、保育の現象を保育者自身の価値観をも含めて率直に検討し合うことができるようになって、95年度13回のカンファレンスにみられるように、保育者が自分の捉え方の特徴に自ら気づくことができたのである。

私は、カンファレンスをすることの大きな意義は、話し合い・考えることを通して保育者自らが自分の感じ方・捉え方を知ることにあると思っている。保育者の悩みやこだわりの中にはその人らしさが映し出されていて、皆でそれを解きほぐすことは本人の「気づき」を促すとともに、他の保育者にとっても示唆となる。今回のカンファレンスでテーマを決めなかったのはそのためであったが、「興味をもったこと、今気になることをだして話し合えたのはよかった」との感想は、そのことにも意味があったことを示している。

私たちの話し合いは今ようやく有効に機能し始めたといえよう。今後はここを土台にしてさらに実践に結びつく研究を模索していきたい。